



「ひとそれぞれ」の、その先に

校長 山本 郁雄

先月、六年生と会津に修学旅行に行きました。慣れない土地での活動でしたが、子どもたちは互いに声をかけ合い、時間を守り、周囲の方々に丁寧に接しようとする姿を随所に見せてくれました。集合場所に早めにそろって友達を待つ子、困っている仲間にそっと手を差し伸べる子、公共の場で周囲に気を配る子。その一つ一つに、これまで学校や家庭で積み重ねてきた学びが、確かに息づいていることを感じました。「自分がどうしたいか」だけでなく、「相手はどうだろう」と考えて行動する。そんな姿に、六年間の成長を感じた修学旅行でした。

さて、今、「ひとそれぞれ」という考え方が大切にされています。一人一人の違いや考えを認め、尊重することは、多様な人々とともに生きるこれからの社会に欠かせません。しかし、「ひとそれぞれ」は、「自分は自分、相手は相手」で終わる言葉ではないと思うのです。自分の思いや考えを大切にすると同時に、相手にもその人なりの思いや考えがあることを想像する。「なぜそう思ったのだろう」「自分が相手の立場だったらどう感じるだろう」と考え、その上で、自分の考えをもち、行動する。そこに、子どもたちに育てたい「共感（エンパシー）」があります。一方で、相手を理解することは、何でも受け入れることではありません。相手の立場を理解しようとした上で、

「それでも、してよいことと、してはならないことがある」と判断する。そのためには、自分の中に一本の軸が必要です。修学旅行で訪れた会津には、「ならぬことはならぬものです」という言葉があります。一見すると、厳しい禁止の言葉のように聞こえます。しかし私は、自分の行動を振り返り、自分自身を律するための「内なるものさし」をもつことの大切さを伝える言葉だと受け止めています。

子どもたちは成長の途中です。時には、自分の思いや言い分を優先することもあります。そんなとき、その思いを受け止めることは大切です。しかし、受け止めることと、すべてを認めることは同じではありません。「相手はどう感じただろう」「本当にそれでよかったのかな」と一緒に考え、必要なときには「ならぬことはならぬ」と伝える。それも、子どもの成長を支える大人の役割だと思っています。

相手を理解しようとする柔らかさと、自分を律する強さ。その両方を育てることが、「ひとそれぞれ」の、その先へ進むことにつながると考えます。

新潟小学校は、家庭や地域とともに、自分の考えをもち、相手の立場を想像し、自分の行動に責任をもつ子どもを育てていきます。そして、他者とともによりよく生きるための「二本の軸」を、日々の教育活動の中でしっかりと育んでいきます。